

このたびは、「榭」67号をお送り頂きありがとうございました。いずれの記事も大変興味深く読ませて頂きました。寺田寅彦の随筆「銀座アルプス」にでてくる南イングランド、バークシャーのReadingについて、ちょっとコメントさせていただきます。寅彦はリーディングと記述致しておりますが、この地の呼び名は、現地ではレディングと発音されます。私は1981年から82年にかけて、レディング大学に留学致しました。

寺田寅彦はドイツ留学の折に、英国にも二度ばかり行っております。年譜によれば、一度目は、1910年4月3日から5月中旬迄ロンドンに滞在、二度目は1911年3月29日にロンドン到着、4月24日には汽車でオックスフォード(オックスフォード)に移動、その後スコットランドのグラスゴーまで行って、5月上旬にロンドンに戻り、5月10日にサウサンプトン(サザンプトン)港からアメリカに向かっております。

レディングはバークシャーの州都で、水(テムズ川)陸交通の要衝、ロンドンから60km、オックスフォードへは40kmの位置にあります。寺田寅彦の日記によれば、1911年4月24日にロンドンのパディントン駅10時33分発の列車でオックスフォードに向かい、11時55分に到着しております。レディング駅も通過していることにはなりますが、途中下車することは無かったようです。寅彦は停車駅の案内に注意をしていなかったのでしょうか。また、英国で現地の人に「銀座アルプス」にのべられているような、レディングの郵便馬車(駅馬車というべきか、旅客ものせる)の話もしなかったのでしょうか。もし、そうしていれば、レディングと呼ばれていることを知ったことでしょう。日記にはReadingと表記されていますので、寅彦自身が当時どのように発音していたのかは、厳密には分かりません。

ちなみに、レディングの有名なビスケット会社は、Huntley & Palmers社(1822年頃創業で1860年代には英国一の大きなビスケット会社だったとのこと)で、レディングの歴史を書いた「The Story of Reading」という本には、次のような説明文が書かれた絵が挿入されております。

Hot biscuits being offered to coach travellers outside Huntley & Palmers' original shop in

London Street. (London Street はレディングの目抜き通りのひとつ)

その絵は、寅彦の思い出の絵を彷彿させるようなものです。しかし、アングルが馬車の後方からのもので、ビスケットを供する少年とその荷車、身を乗り出した馬車の上の旅客が雪景色の街を背景に描かれておりますが、御者は見えません。英国サッカーのプレミア・リーグには、現在レディングFCというチームが所属致しており、NHKBSで、たまにレディングFCの試合が見られます。残念ながら、それほど強くはないので次期には入れ替えて姿を消すかもしれません。

札幌 田原哲士